

近代フランスにおける王立庭園の創設(2)

— ファゴンからビュフォンへ —

大橋完太郎

1. トウルヌフォール以降: ヴァイヨンとアントワーン・ド・ジュシューの時代

トウルヌフォールに続いてフランスで活躍した植物学者に、セバスチャン・ヴァイヨン(Sébastien Vaillant)がいる。1669年にポントワーズの近くのヴィニーで生まれ、その地で医学を学んだヴァイヨンは、1691年にパリのオテル・デューに外部研究員(externe)として受け入れられたときにトウルヌフォールの講義にふれ、彼の熱狂的な弟子となる。ヴァイヨンはファゴンの面識も得て秘書に任命され、王宮の庭園での植物採集を補助する役を務めた。ファゴンとトウルヌフォールのコレクションに数多くの標本を加え、庭園にも新しい植物を増やしたヴァイヨンは、庭園の耕作を担当する監督官に任命された。この役職はもともとラ・ブロスのために作られたものであったが、フルクが退いた後ヴァロによって1653年に取り潰された。1672年にダカンによって再度設立される。ファゴンはこの役職を無益なものと思っていたが、宮廷での執務によって庭園から遠ざかることも増え、この役職の必要性を感じた。そこでファゴンはヴァイヨンをこの役職にもっともふさわしい人物と考え、学識ある活動的な人物によって耕作を監視させることにした。数年後にヴァイヨンは実験助手に任命され、地方の学生たちにパリ近郊の植物についての講義を担当する。彼は学生たちのために『パリの植物学』を著した。この書物は彼の死後、友人であるヘルマン・ブールハーフェ

(Herman Boerhaave)の取り計らいによって1727年に刊行された。表紙に書かれた正式なタイトルは『パリの植物学、あるいはパリ近郊で見出される植物のアルファベット順一覧 *Botanicon Parisiense ou Dénombrement par ordre alphabétique des plantes qui se trouvent aux environs de Paris*』とされており、挿絵画家としてクロード・オブリエ(Claude Aubriet)の名も記されている。献辞と序文は編纂者でもあるブールハーヴェによって書かれており、著作が死後刊行であることや、トウルヌフォールの著作をもとにヴァイヨンが自らの観察結果を付け加えたこと、収録されている図版が見事であることなどが書かれている。

1714年と1717年には、ファゴンはヴァイヨンの求めに応じて二棟の温室を建築し、そこでヴァイヨンは赤道近辺の地域の植物を育てることを試みた。温室では当時すでにオランダで用いられていた温水循環の新技术が用いられ、そこで育てられた新しい植物が学生の教育に供された。

トウルヌフォールは1708年に死去したため、ヴァイヨンによる植物園の改良を目にすることはなかった。最初にトウルヌフォールの後任として選ばれたのはダンティ・ディナール(Danty d'Isnard)であったが、健康上の問題で彼は早々にその職から退く。ファゴンがその後に選んだ人物がアントワーン・ド・ジュシュー(Antoine de Jussieu)である。1686年にリヨンに生まれたジュシュー

は、モンペリエで医学を学び、その後植物学を学んだのちに1708年にパリを訪れていた。リヨンに戻る途中で、ノルマンディーとブルターニュの調査を終え、1709年にヴェルサイユを訪れたジュシューは、そこでファゴンの面識を得て、またリヨンでの彼の植物学の師であったリヨンの医師ゴワフォン(Goiffon)の推薦を受けて、1709年にファゴンによってディナールの後任として王立庭園の教授職に任命された。パリ大学の人脈を外れて任命されたジュシューであったが、最終的に1712年に科学アカデミーに迎えられ、同年にソルボンヌの医学部にも受け入れられる。ジュシューは前任のトゥルヌフォールの業績に倣ってフランス南部の植物を探索し、新種の植物を多数報告した。また、1716年には政府からの援助を受けてスペインおよびポルトガルを訪れる。この訪問の際にアントワヌに同行したのが、当時17歳の弟、ベルナール・ド・ジュシュー (Bernard de Jussieu)であった。その他の同行者としては画家のルイ・シモノー (Louis Simoneau)や、バルセロナの医師サルバドル (Salvador)がいる。10ヶ月の不在ののち講義のために戻ったアントワヌは、その後庭園を離れることはなく、ヴァイオンと同じく異国の植物の獲得と繁殖に従事した。とりわけ、1719年にアンティールから運ばれてきたコーヒーの苗と種子をもとに、現地での生育を再現してフランスに順化させたことはアントワヌの業績として知られている。ヴァイオンとジュシューは当初ライバル関係にあったが、やがて相互に評価する間柄となった。ヴァイオンはベルナールに植物学を教え、ベルナールを自らの後継者として考えるようになった。

1699年にリヨンで生まれたベルナール・ド・ジュシューは、1714年に自らの学問を修めるためにパリを訪れ、パリにいた兄アントワヌのスペイン行きに同行する。スペインからの帰途、ベルナールはモンペリエに逗留して医学を学び、1720年に博士の学位を取得する。1725年に科学アカデミーの会員となり、同年トゥルヌフォールの『パリ植物誌』の新版を刊行した。ベルナール

はヴァイオンの死去した1722年に彼の後任を務めた。ヴァイオンは博物学のコレクションと非常に状態の良い多数の植物標本を残したが、これらは国王によって買い上げられ、王立庭園のその他の収集物と一緒に収められた。

2. 王立庭園の化学と解剖学

アントワヌ・ド・ジュシューの甥であるアントワヌ・ローラン・ド・ジュシュー (Antoine Laurent de Jussieu, 1748-1836)が、『自然史博物館年報 *Annales du Museum d'Histoire Naturelle*』に連載した「自然史博物館についての歴史的覚書 *Notice Historique sur le Museum d'Histoire Naturelle*」(以下、「覚書」と略記)は、この時期の王立庭園において、ひとつの学問的な展開が起こったことを述べている¹。この展開は、当時の注目すべき庭園における研究領域が、生物学としての植物学から、化学的医学になったことを示唆するものである。

ヴァイオンの死に先立つこと数年前に死去していたアントワヌ・ド・サンティヨン (Antoine de Saint-Yon)についての記述がこうした推移を物語る端緒となるが、ここではファゴンが化学講座に対して与えた重要性が問題となる。1672年にパリ大学医学部の医師となり、1702年に同学部の学部長となったサンティヨンに対して、ファゴンは化学講座の教授職を与える。彼は教授の資格を持たなかったが、1707年に健康上の理由からその職を退くまでファゴンに対して長年化学講義をおこない、ヴァイオンも1692年に彼の講義に参加している。サンティヨンが職を退いた年に彼の代わりを務めたのがルイ・レムリ (Louis Lémery)であり、その後の二年間はクロード・ベルジェ (Claude Berger) がその任に当たった。1697年から科学アカデミーの会員となり1700年にはパリ大学の医師となったベルジェはファゴンと姻戚関係にあり、彼の助手も務めていたが、胸部疾患を患い1712年に療養地のパッシーにて33歳で死去した。ベルジェ

の代わりに1710年からその職に就いたのがエティエンヌ・フランソワ・ジョフロワ (Etienne-François Geoffroy)である。1672年にパリで生まれたジョフロワは、当初薬学の道に進むも医学へと志を変え、モンペリエで医学を学ぶ。パリに帰ったのち1699年に科学アカデミーに迎えられ、1706年にはパリ大学の一員となり、さらに1709年には王立コレージュの教授となる。

サンティオン、ベルジェ、ジョフロワらは、実験教授の助けを借り、薬剤師たちを養成するクラスで化学と薬学の実験をおこなっていた。だがこうした業務にあたっていたのは彼らが最初ではない。ニコラ・ルフェーブル (Nicolas Le Fèvre) とクリストフ・グラゼ (Cristophe Glaser) は、第一医師のヴァロに任命されて同じ分野の実験を担当していたし、その後1672年から1680年のあいだ、同じ役目をシャラ(Charas) が担っていた。ルフェーブルはプロテスタントであったが、信仰を保持したまま、多くの実験を行うことができた。グラゼは王およびオルレアン公の薬剤士に任命されている。両者はともに、自らの著作のなかでは、王立庭園の実験教授であることを序文内でしか言及していない。このことは彼らが第一医師の名の下でいつでも解任可能な職務として各種の実験をおこなっていたことを示している。

ルフェーブルは1660年に『理論的実践的化学 *Chimie théorique et pratique*』を著し、当時評判となり多くの版を重ねた。実験教授になったのはこの時期だと推測されるが、彼は1664年にパリを離れて、チャールズ二世の招きに応じてイングランドで王の宮廷の化学実験室の指導にあたった。

ルフェーブルの後任者であったグラゼは1663年に『化学論 *Traité de chimie*』を著し、これもなんとか再版されている。フォントネルは21歳のニコラ・ルムリが1666年にグラゼのもとを訪れたことを記している。ルムリは王立庭園の実験教授であるグラゼのところで実験と解析を学ぼうとしたが、「グラゼは真の化学者であり、難解な考えに満ちていて、それを食欲に望み、また社交性が

ほとんどなかったので、ルムリは2ヶ月でグラゼのもとを立ち去った」と書かれている²。このエピソードは当時流布していた錬金術士的なイメージの化学者像を物語っている。グラゼは1678年に死去したが、1672年以降はシャラが実験教授の職に就いたのもあり実験を行ってはいなかった。シャラがプロテスタントであることを理由にフランスを去ることになった1680年まで旺盛な実験活動を行った。

シャラのあとで化学の実験教授として初めて名があがるのがパリの薬剤士シモン・ブルデュック (Simon Boulduc) である。就任した年は定かではないが、シャラが退任してまもなくのことだと推測される。少なくとも1695年以前に就任したのは確かだとされている。初の化学の実験教授であったブルデュックは1729年までこの職を務めたが、彼以降つねに誰かがこの職を務めるようになった。

当時、解剖学の正教授職はまだギシャール・ジョセフ・デュヴェルネ (Guichard-Joseph Duverney) が担当していた。当時のデュヴェルネについては、フォントネルによれば、「デュヴェルネは庭園での解剖学の実習を、かつてなかったような水準で行った。驚くほど多くの学生たちがそこに赴き、ある年には外国からの150人もの来訪者を数えた。彼らのうちの多くは、自分の国に帰れば偉大な医者や外科医であったので、師であるデュヴェルネの名と彼への称賛はヨーロッパ中に広まった。」と報告している³。デュヴェルネは巧みな雄弁術で観衆を熱狂させ、自らもそうであるように、解剖学への興味で多くの人を満たした。後年デュヴェルネは人間と動物についての解剖をおこない、非常に精緻な解剖学の標本を多数残した。それらはのちにアカデミーに遺贈された。デュヴェルネの残した標本は植物園に収納され、それ以降の解剖学的蓄積の基盤となった。一例として「覚書」内でジュシューがあげているのは骸骨の標本である⁴。この標本は、ヴァイヨンとオブリエが居

住していた旧館が1785年に図書館として建て替えられるまで、収納されていたという。

デュヴェルネには彼の実験を補助する多くの弟子がいた。そのうちの一人であるタッサン(Tissin)は王の砲兵隊の外科医を務めた人物であったが、デュヴェルネの病気の歴史に関する講義の傍で解剖の実験をおこなうことでデュヴェルネの説を実証し、多くの聴衆を引きつけたことで知られている。甥のピエール・デュヴェルネ (Pierre Duverney) は、長年彼に付き従い実験をおこなった人物として名高い。ピエールの後、同じ役目を務めていた人物として、1728年に『パリの外科医による死亡一覧 *Index funereus Chirurgorum parisiensium*』を著した高名な外科医ジャン・ドゥヴォー (Jan Devaux) があげられる。ドゥヴォーは1713年から1726年のあいだ、ジゴ (Gigot) やマルタン (Martin)、アルノー (Arnaud) やポンスレ (Poncelet) らの多くの外科医に王立庭園の実験教授の資格を与えた。ドゥヴォーのほかには、後述するラペイロニ (Lapeyronie) も同じ役にあった。

ファゴンの努力によって、植物園は尊敬すべき学問の場所となった。植物学、化学、解剖学の三つの講座の主任教授の座は公の尊敬を集める智者によって占められ、教授を補助する実験教授も同様の評価を受けていた。教育のために新しい階段教室が建設され⁵、栽培される植物の数も日増しに増大した。セヌ川の水の利用権 (concession) に加えて、アルクイユ川の水の利用権も追加された。薬品庫はキャビネットの形をとり、のちの発展を予感させるものとなった。ジュベールの後継者であり庭園に住んでいた画家オブリエは新しい植物のデッサンを続けて、ガストンのオルレアンによって着手された犢皮紙本のコレクションの数を増やした。このコレクションはルイ14世が死去するまでファゴンに託されていた。

1715年、ルイ14世が死去し、幼いルイ15世に王位が移ると、年老いて病身であったファゴンは引退を求めて、

若き王の第一医師はポワリエが務めることになった。だが摂政のオルレアン公は、ファゴンが生きている間は彼を植物園の監督官にとどめるべきだと考えた。ファゴンは自らが生まれた植物園で落ち着いた晩年を過ごし、余裕があるときには庭園の発展に手を貸し、彼が職に就かせた人たちの仕事を援助した。そうした状況が3年ばかり続いたのち、1718年の3月11日にファゴンは死去した。ファゴンの業績は、監督官として数々の標本作製し、それらを受け入れることのできる施設を準備し、それらの保存方法を定め、自らの職務を名誉に思う教授たちを任命した点にあったと「覚書」には記されている。

3. 王立庭園監督官の独立:ポワリエからシラクへ

前述したように、ファゴンの次に王の第一医師となり、その兼担職務としての植物園の監督官にも就任したのはルイ・ポワリエ (Louis Poirier) である。ポワトゥ地方のリシュリュー出身のポワリエは、1676年にパリのソルボンヌ医学部の医師となり、その後1706年には学部長となって、即位以前のルイ15世付きの医師となった人物であったが、新しい職務にふさわしい成果を出すにはあまり時間がなかった。ポワリエはファゴンの死から19日後の1718年3月30日に死去した。賢者であり明晰な医師であり、学問の真の友人という名声を伴っての死であった。

空白となった名誉ある地位は、多くの医師が属望すべきものであった。世論はピエール・シラク (Pierre Chirac) が就任することを要求していた。シラクはモンペリエの教授職にあった人物だが、オルレアン公によってパリに招聘され、彼の第一医師となっていた。けれども摂政の第一医師に幼い王の健康を委ねることには政治的な理由から抵抗があった。そこで摂政は王の第一医師として、ルイ15世の父である王太子ルイの第一医師であったドダール (Dodart) を任命する。それと同時に、1718年3月31日に発布された勅令によって、シラク

に王立庭園の行政を務める地位があたえられた。ここにおいて初めて、王立庭園の監督官は王の第一医師の職務と分離した役職となり、シラクがその任用体制において初めて監督官となった。ついで布告された1718年4月1日の勅令によって、職名は監督官だが、ファゴンと同様の権限をもつことが定められた。

シラクの略歴を補足しておく。ピエール・シラクは1650年にルエルグ地方のコンクで生まれた。シラクは当初は聖職者であったが、モンペリエ大学の大学長の息子たちの家庭教師を勤めていたとき、大学長の勧めによって職業を変えて、医学の講座を受講するようになった。1682年に博士の学位を取得し、すぐにモンペリエ大学の教授の座に就いたシラクは、教育の面で卓越しており、多くの学生たちを引きつけた。やがて彼は医療実践にも関心を向け、そちらでも成功を博する。1692年にシラクはルシヨン(Roussillon)の軍隊の医師となり、次いで1706年にはスペイン継承戦争でオルレアン公が参加したトリノの戦いに従軍し、切られた傷によって危険な状態にあった公の腕の負傷を治療し、彼を救った。その後シラクはパリに向かい、医療行為を行う権利をもった官職を買い、パリにおいて大いに評判を得た。1715年には、シラクはオンベルク(Homburg)の後を継いで、その時には摂政となっていたオルレアン公の侍医となった。科学アカデミーは1716年にシラクをメンバーとして迎え入れ、その二年後には植物園の行政を任される。1720年、シラクはマルセイユでペストを治療したいと申し出るが、訴えは却下されて、シラクの指定した三人のモンペリエの医師たちがこの名誉ある危険な職務に赴く。シラクの考えでは、医学アカデミーは治療技術の点で欠点があったものの有益な制度であり、そこから大きな利得を引き出すことができると考えられていた。シラクはアカデミーの改革案を起草したが、この改革はそれを認可していた摂政が1725年に死去したために実行にはうつされなかった(同様の改革案はのちの1776年にヴィックダジュール(Vicq-d'Azyr) が別の形

で提起することになる)。シラクは1730年に王の第一医師となるが、医学アカデミーを立て直す余裕がないまま1732年に死去する。

アントワーヌ・ローラン・ジュシュール(Antoine-Laurent Jussieu)は、第一医師と庭園監督官との分離というこの決定が王立庭園にとって不幸を招いたと述べている。ジュシュールによれば、その第一の理由は、シラクは自らが得意としている医学の実践のみに専心し、その他の自然科学は付随的なものでしかないとみなして重視しなかった点にある。結果としてシラクは庭園の維持のために割り当てられた基金を切り崩して自らの好む分野を重点化してしまった。不幸の第二の理由は、不寛容で高圧的なシラクの性格にある。シラクは教授たちへの統制を強め、彼らの講義の形式や性質、講義時間を画一化してしまった。シラクは1729年の4月28日の内規によって、講義の数を定め、実験で使用する植物は規定のものに定める権利と義務を監督官のものとし、教授たちはこの方針に従わなければならないとした。また、画家たちには毎年80枚のデッサンを描くよう要請したが、描く植物は日常的によく使われるものを優先し、希少種や珍種の植物のデッサンは最初に描かれたものが欠損するまで描かないよう厳しく命じた。実験助手に対しては、彼らが外国人と書簡をかわす時には、届けられた書簡の入った箱を監督官の前で開けて、内容を監督官が確認することが義務付けられた。この内規によれば、輸送費及び通信費として、1400リーヴルの資金が割り当てられている。教授たちは毎年、彼らが教えている事柄について、少なくとも8ページの報告を、監督官の指導及び選定の元で発行することが求められた。なかでも植物学の教授たちには、博物学のキャビネットを増やす特別な命令がくだされ、多くの珍しい植物が外国から箱に入ってもたらされた。

上にあげたもののほかにも様々な規則があったが、専制的な監督官によって課されたこのような規則は、施行されることがないはずのものであったし、実際には

遵守されていなかった。けれども、こうした改革によって、海外からの物資の輸送の遅れが生じやすくなり、手紙のやり取りもしばしば妨げられるようになったので、教授たちの抗議するところとなった。アントワーヌ・ド・ジュシューは、こうした内規の施行のあと四年間、肥料や工作機械のための費用を自分で捻出せねばならなかったし、実験助手のベルナール・ド・ジュシューも、1727年にイングランドから戻ってくる際、彼が庭園に植えようとした100種もの生きた植物の輸送費用を自分で払わねばならなかった。

植物学の教授たちにとって自分たちの正しさを示すことは困難であった。シラクは大きな影響力をふるっていたが、1730年のドダールの死後に第一医師の座に就くことでその影響力はますます大きくなった。シラクは、施設を豊かにするためにではなく、教授たちからの批判を封じるために自らの力を用いた。フォントネルは次のように述べている。

環境のよくない温室の中で、異国の植物はやせ 細り、倒れていった。こうした植物が減びても、それを新たに植えることはできなかった。囲いの割れ目を修繕することもできなかったし、広大な土地が荒れたままだった。上位の人からしか来るはずのないよい影響が完全に欠落していて、あらゆるものがその欠落に苦しんでいた。けれども植物学の教授たちは変わらぬ勤勉さといっそうの熱意で自分たちの講義を行った。もはや教授たちだけによって保たれていた学問は、そうした勤勉さや熱意をさらに必要としていた⁶。

植物学に比べると、庭園でおこなわれていた他の分野の教育には監督官からの妨害と感じられるような介入はなかったようである。解剖学の講座はシラクとの関係は良好なままであったし、予算の変更を求められることもなかった。シラクは解剖学の教授たちからは尊敬さ

れていたが、これにはシラク自身もモンペリエでは解剖学の講座を担当していたからという理由もあった。

4. シラクの時代の終わり

シラクが庭園の監督官に任命されたとき解剖学の講座を担当していたのは先述のデュヴェルネで、40年近くその務めに従事していた彼はすでに名高い存在となっていた。当初はデュヴェルネが自分で準備した部位を実験講義で見せていた。けれども胸の病気を患ったこともあり、代理の医師による講義となることもしばしばであった。フォントネルは当時の状況について次のように報告している。

彼（＝デュヴェルネ）が選んだ敏腕の外科医が彼の元で解剖実験を行い、デュヴェルネはかろうじてその説明をするにとどまっていた。この場所で骨の解剖と骨の病気について教育したのは、デュヴェルネが最初であった⁷。

デュヴェルネはルイ14世の息子である王太子にも解剖学講義をおこなっている。この講義はモントジエ公爵やボシュエなど、当時の著名人が多数参加する前でおこなわれた。解剖学への興味を聴衆に与える講義が理由で、解剖学的趣味が社交界でも流行し、人々は講義で示された解剖された部位を持ち歩いて見せびらかし、解剖を見に行こうと誘ったりしていた。講義におけるデュヴェルネの生き生きとした語り口と演説の仕方は、職業上の理由で朗読術を学ぶ人々をもひきつけ、当時の著名な喜劇役者バロン（Baron）も聴講していた。

デュヴェルネは数多くの動物を解剖したが、たとえばその描写は科学アカデミーの年報の第1巻、とりわけデュアメルによって1701年に出されたラテン語版年報に詳しい。そこでは彼が1681年に解剖した像についての報告がある。数多くの解剖をおこなったデュヴェルネだが、著作は聴覚期間に関するものが一冊だけで、新し

い版を準備している最中に死去してしまった。また彼は昆虫に関する書物も準備していたが、多くの研究と観察を必要とするものであった。晩年病身のデュヴェルネは、その時代の一番の解剖学者であるウインスロウ (Winslow) に代理に講義を頼む。デュヴェルネはアカデミーの会合に足繁く通っていたわけではないが、アカデミーは彼の長年の働きに対して年金を受給する資格と権利を与えた⁸。

フォントネルの証言からもわかるように、デュヴェルネの時代にはまだ解剖学の実験教授に独立した職位が認められていなかった。解剖実験は当時の外科医たちが継続して行っていて、公的な目録が残されていないので、名が伝承されて残っていない場合は、当時刊行された論考や著作の共同署名者として存在を認めることしかできない。そういった外科医たちのなかで、「覚書」は、デュヴェルネの甥(弟)ピエール・デュヴェルネ⁹やジゴ (Gigot) の名をあげて紹介している。

シラクの時代においても、画家のオブリエは変わらぬ熱意を持って植物を描き続けていた。栽培の監視を担当していたのはベルナール・ド・ジュシューで、庭師のサンタールが彼の命令通りに庭を管理し、ベルナールは実験助手の資格で前任者ヴァイヨンと同じ職務を果たしていた。ベルナールは薬草庫の管理にも当たっていたが、1729年の規則によって、薬草庫は博物学陳列庫 (cabinet d'histoire naturelle) と呼ばれるようになった。だがシラクはこの管理の役目をベルナールから取り上げて、著名な眼科医のドゥムール (Demours)、ついでノゲ (Noguez) という医師にこの役目を負わせた。ノゲは外遊が多く、管理業務をなおざりにしていた。

1732年にシラクが没するまでの庭園の状態は上記のようなものであった。1732年3月1日に死去したシラクは、医師としては評価されたが、彼が荒れるがままにした庭園施設の行政官としては評価されなかった。シラクが庭園の監督官と第一医師との兼任した15ヶ月のあいだに、第一医師の後任としてシソワノー (Chicoisneau) を擁

立し、彼を就任させることに成功した。だが庭園監督官の後任については、第一位置との兼任は実質上不可能であるとの見解が支配的であったため、アカデミーの一員であるデュフェ (Dufay) が着任することになった。1698年にパリで生まれたデュフェは若いうちから学問に傾倒し、1723年に化学者としてアカデミーに迎えられた。最初は燐光や磁石に関する研究をしていたが、政府の命令で染色の研究に着手していた。

デュフェは専門の学者ではなかったが数学と自然学に詳しく、幾つかの論考を公開した実績もあった。また、特定の学問を好むというよりも、庭園で教えられるあらゆる分野を大事にするという点でもふさわしい人物であると考えられた。とはいえ、前任者によって軽んじられていた植物学を重視することが要請されていたので、デュフェは植物学の立て直しに着手した。アントワーヌ・ローランとベルナールのジュシュー兄弟と友人であったデュフェは、シラクの時代の行政にあえいでいたこの二人の意見を参考にした。また、オランダに行き、1734年には同じ目的でベルナール・ジュシューを連れてイングランドに赴くなど、各地の学者と交流を図った。ベルナールがこの出張の帰りにヒマラヤスギの苗を持ち帰り、庭園にそれを植えたことが報告されている。フォントネルによれば、デュフェは就任してから7年という短期間のうちに庭園を復興したという¹⁰。1739年、デュフェは梅毒にかかって死去するが、死の際に後継者として指名したのがビュフォンであった。

¹ 「自然史博物館についての歴史的覚書」は、『自然史博物館年報 *Annales du Museum d'Histoire Naturelle*』第1号(1802)に最初に掲載され、6回にわたって連載された。掲載号・年度とページは以下の通り。

«Notice 1», *Annales*, Tome 1, 1802, p. 1-14.

«Notice 2», Tome 2, 1803, p. 1-16.

«Notice 3», Tome 3, 1804, p. 1-17.

«Notice 4», Tome 4, 1804, p. 1-19.

«Notice 5», Tome 6, 1805, p. 1-20.

«Notice 6», Tome 11, 1808, p. 1-41

² Fontenelle, *Académie de Science*, 1715, p.73.

³ Fontenelle, *Eloges*, pp.125-126.

⁴ «Troisième notice», p.15, n.1.

⁵ だがこのとき新築された階段教室がのちにビュフォンが増築したものと同じものであるかどうかはまだ判明していない。

⁶ Fontenelle, *Histoire de l'académie des sciences*, 1739, p.77.

⁷ Fontenelle, *Histoire de l'académie des sciences*, 1750, p.128.

⁸ 引退後のデュヴェルネは庭園の端の川沿いに建っている小さな館に住んでいた。この館は1785年に庭園の大規模な拡大がおこなわれるまで壊されずに残っていた。

⁹ ピエール・デュヴェルネに関しては、ギシャール・ジョセフ・デュヴェルネの甥であるという説と弟であるという説の両方があり、血縁関係が確定されていない。

¹⁰ Fontenelle, *Histoire de l'académie des sciences*, 1759, pp.78-83.

<参考文献>

- Duris Pascal, *Linné et la France: 1780-1850*, Genève, Droz, 1993.
- Fontenelle. *Éloges des académiciens ; avec l'Histoire de l'Académie royale des sciences en MDCXCIX....*, 2 vols., 1740.
- Gayon, Jean (dir.), *BUFFON 88*, Paris, Vrin, 1992.
- Hanks, Lesley. *Buffon avant l'«Histoire naturelle»*, Paris, P.U.F., 1966.
- Hoquet, Thierry. *Buffon/Linné: Éternels rivaux de la biologie?*, Paris, Dunod, 2007.
- Jussieu, Antoine Laurent de, «Notice historique sur le Muséum d'histoire naturelle», *Annales du Muséum d'histoire naturelle*, 1, 1802.
- «Seconde notice historique sur le Muséum d'histoire naturelle», *Annales du Muséum d'histoire naturelle*, 2, 1803.
- «Troisième notice historique sur le Muséum d'histoire naturelle», *Annales du Muséum d'histoire naturelle*, 3, 1804.
- «Quatrième notice historique sur le Muséum d'histoire naturelle», *Annales du Muséum d'histoire naturelle*, 4, 1804.
- Laissus, Yves. *Le Muséum national d'histoire naturelle*, Paris, Gallimard, 1995.
- Roger, Jacques. *Buffon*, Paris, Fayard, 1992.
- *Les Sciences de la vie dans la pensée française au XVIII^e siècle* (Nouvelle édition), Paris, Albin Michel, 1993.
- Spary, E. C. *Utopia's Garden*, Chicago, University of Chicago Press, 2000.
- Thouin, Gabriel. *Plans raisonnés de toutes les espèces de jardins*, Paris, 1820

